とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	NICOLANDほいくえん
施設所在地	東京都青梅市新町４－１８－９
法人名	株式会社モアスマイルプロジェクト

１．活動のテーマ

＜テーマ＞

生き物

＜テーマの設定理由＞

（テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など）

自園では自然とのふれあい・活用を積極的に取り入れていくという保育方針を大切にしている。そのため、子どもたちは戸外でさまざまな生き物に接する機会が日頃から多い。自ら親しみを持って昆虫や動物、植物に手を伸ばす姿が日常となっている。そういった子どもの姿を見て保育者が春先におたまじゃくしを園に連れてきた。小さなおたまじゃくしから足が生え、カエルに成長していく姿を子ども達がとても興味深く観察していた。そのような子どもの姿、園の特色から、「生き物」をテーマとして設定する。子どもたちの身近にいる昆虫・動物・植物をテーマとすることで、そのものを大切にする気持ちや、色や形、大きさなどさまざまな違いへの興味・関心を深めるためこのテーマの元、活動をすすめていきたい。

２．活動スケジュール

令和６年７月～８月：夏の生き物（カブトムシ・クワガタ）の観察と飼育
令和６年９月～令和７年２月：戸外で見つけた生き物等の生態を本や映像を通して知る
令和７年３月２７日：移動動物園で実際の動物に触れる

３．活動のために準備した素材や道具、環境の設定

（活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具）

飼育ケース（餌、木、クッション等飼育に必要な物品）
絵本、図鑑、書画カメラ、ＰＣ、電子黒板
園内敷地内にて、移動動物園の開催

４．探究活動の実践

＜活動の内容＞

・生き物の飼育と観察
・本や映像を通して生き物の生態を知る
・実際に生き物に触れる

＜活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり＞

（活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等）
・春先におたまじゃくしを園に連れてきた際にとても興味を持ち、毎日その様子を観察する子どもがいたため、夏の昆虫（カブトムシやクワガタ）を園に連れてきた。飼育ケースで飼育しながら、昆虫の体の色、動き方、食べる物などを観察した。はじめて見る子もいたようで、恐る恐るさわる子もいた。角があることから‘こわい生き物’と感じる子もいたようだ。保育者が飼育ケースに腐葉土を敷いたり、のぼり木などを入れていると「なんで入れるの？」と興味を持つ子がいた。土は虫が潜るためであること、ひっくり返ってしまった時に自分だけでは起き上がれないためつかまるために木を入れることなどを伝えた。
「へぇ」と言いながら、２歳児は他児に「クワガタは転んじゃったら自分で起きれないんだって」と伝えていた。また、餌として昆虫のゼリーを用意したところ、昆虫がその上に登り、餌を食べている様子を見ることができた。「食べてるー」と大興奮な子もいれば実際に食べているかどうかがはっきりわからないため、「本当に食べてる？」と不思議がる子もいた。日中の動きが少ない昆虫のため、動いている姿を見ると子ども同士でじっくり観察していた。
・普段行く誠明学園の広場に透明のカップを持って散歩に行った。興味を持った昆虫をじっくり観察するため、また昆虫に対して恐怖心がある子どもが怖がることなく観察ができるようにという保育者の意図である。思い思いに生き物を探して歩いた。大きなくぼみ、地面に開いた穴等を見つけて「虫さんのお家だよ」と言う子がいると、近くにあった木を指さし「これも虫さんのお家じゃない？」というやりとりがあった。保育者が「ほかにどんなところに虫さんが住んでいるかな？」と言葉にすると、朽ちた切り株、木に開いた大きな穴、枯葉の下などを子どもたちが探し始めた。保育者と一緒にダンゴムシを発見した子が他の保育者や他児に伝えに行っていた。持ってきていた透明カップを上からかぶせて観察をはじめた。「丸くなったね」「あっ、動いた」などダンゴムシの様子を言葉にして感動や気付きを子ども同士で共有しているようだった。その様子を見守った後、保育者が「ダンゴムシはどこに住んでいたかな？」と問うと「大きな穴にいた！」と答えが返ってきた。ダンゴムシの観察が終わると「今度はちょうちょ探してくる」と走り出した子がいたが見つからずその様子をみた他児が「お家にいるんだよ」と言い、今度は蝶探しがはじまった。
・戸外での活動で子ども達が興味を持った‘生き物の住処（住んでいるお家）’。地域の図書館に行き、借りてきた生き物の図鑑を書画カメラを用いて電子黒板に映しだし他の生き物の住処を調べてみることにした。保育者が「虫さんたちってどんなお家に住んでいるんだろうね」と問いかけると子ども達からは「葉っぱの下だよ」「木の中だよ」等の反応があった。実際に自分たちが探して目にした体験からの返答である。実際に大きな電子黒板にダンゴムシの住処が映し出されるとそれは子ども達が答えた葉っぱの下であった。しかし、映像で見ると「えー！そうなんだ！」と予想外であったと言うような反応だった。実際に自分の目で見たもの、映像を通して知った正解が合致した瞬間だったのだろう。その後、子ども達から「ちょうちょのお家は？」「ミミズのお家はどこ？」等の声があがり、図鑑には載っていなかったので、パソコンを用いてそれらの昆虫が生まれてから生活する様子を動画で調べてみることにした。たくさんのミミズを一度に見た子どもたちは「ミミズの世界だね」とつぶやいていた。
・これまでの体験を通して、普段子どもたちがあそんでいる誠明学園の広場に対して子どもたちは‘この広場自体が生き物が暮らす大きなお家’だと感じているようだ。広場に着くと早速生き物探しがはじまった。保育者がたまたま蚕の繭を見つけた。
「これなんだか知ってる？」保育者の問いかけに２人の子どもが周りに集まってきた。しかしその距離感から警戒心が感じられた。保育者が穏やかに「これはね、蛾の幼虫さんのベッドなんだよ」と伝える。すると「幼虫さんのベッド？」と言いながら少しずつ距離が縮まり「中から幼虫さん出てくるかな？」と覗き込んでいた。「中を開けてみる？」と聞くと再び距離をとりながら「だめだめ。触っちゃだめだよ。」と答えた。保育者が「大丈夫だよ。少し見させてもらおうよ」と伝え中をそっと開けてみる。その様子を見ていた子どもが「優しくね。」とと言う。これまでの生き物との触れ合いから、力加減の意識がうかがえた。実際に幼虫の確認はできなかったが、実物を見ることよりも‘その生き物とどう関わったら良いか’を子どもたちが考えるようになっていることがわかり貴重な場面であった。
その後、別の２人が散歩で通りかかった犬に興味を示し近づこうとしていた。飼い主の方に許可をもらい、近くで見させてもらった。その様子に「なになに？」とどんどん子どもたちが集まってきた。先ほど、幼虫に対して優しく扱うようにと発言した子どもも集まってきた。たくさんの他児が集まってきたことで最初に犬に興味を持った２人が興奮してしまい、犬のそばで大きな声を出して走りはじめた。それを見た他児も大きな声を出して走り回る。保育者が「犬さんの近くにいる時は大きな声はいけないよ。静かにね。」と声をかける。「なんで？」と不思議がる子どもたち。「犬さんはね、耳がとっても良いから、近くで大きな声を出すとお耳が痛くなっちゃうんだ。」と伝える。すると、さっきまで走りまわっていた子ども達も静かに保育者の周りに集まり、「耳が痛いの？」「どうして耳が良いの？」と疑問を口にした。自分たちよいも圧倒的に小さな生き物に対しては優しく扱おうとする気持ちがあるのに、自分たちと変わらない、もしくは自分たちよりも大きな生き物になると、途端に関わり方がダイナミックになってしまっていた。きっとそういった生き物との関わりの機会がなく、関わり方がわからないからであろう。小さな昆虫だけではなく、もう少し大きな身近にいる生き物に対する関わり方、生態についても伝えてあげたいと感じる出来事であった。
・移動動物園を開催し、小さなひよこ・モルモット、うさぎ、アヒル、チャボを目の前にした子ども達。動物たちが驚いてしまうので、場内を走らないという話を聞くと、走る子はおらず、小さな動物を踏んでしまうような子もいなかった。はじめは警戒して、なかなか場内に入ろうとしない姿を見て、保育者がそっとひよこを手の平で包み、「優しく優しくね」と伝えながら子どもたちに見せると頭をなでる子もいた。そこから子どもたちがどんどん場内に入った。心地が良いのか、ひよこが目を閉じると「目つぶったね」と言いながらその様子をじっと見ていた。モルモットやうさぎにはエサをあげることができたので、怖がることなく家庭から用意してきた野菜をあげようと近づいていく子も多かった。なかなか食べてくれず、追いかけまわす姿もあったが、保育者が、しゃがんで少し口元に持っていってあげると良いとその姿を見せると真似してエサを口元に持って行っていた。ウサギがキャベツを食べる姿を見て、「食べたー！」と大興奮だった。また、キャベツは食べたが人参は食べてくれないなど、動物によって違いがあることにも気付いたようだった。慣れてくると動物を自分から抱っこできる子もいて、友達が抱っこしている様子を近くで見て、自分も抱っこをしてみたいと保育者に手助けしてもらい抱っこをする児もいた。動物を膝の上に乗せると自然となでる手が優しかった。やはり実際に動物とふれあう機会を設けることで、関わり方を実体験により学べることを感じた。０歳児も座って休んでいるアヒルの隣で一緒に座っていた。はじめての経験からから、なかなか場内に入れなかった子には保育者がそばにつき、少し離れたところで一緒に観察した。友達が場内でエサをあげている姿を見て、場外からエサをあげられるまでは経験することができた。その子によって動物への興味の持ち方、度合いが異なるた

め個々に活動を促すことができ良かった。

＜振り返りによって得た先生の気づき＞

保育者の声のかけ方、環境設定が子どもたちの興味・関心のきっかけになるということを改めて感じた。大人（保育者）の態度によって子どもたちの生き物へのかかわり方も変化した。保育者が大きい声を出してしまったり怖がってしまうと子どもも警戒していた。保育者が落ち着いた口調、優しく触れてみることで子どもも徐々に近づいたり触れてみようとしていた。
また、生き物をテーマとして設定したことで生と死をどのように伝えていくかが難しいと感じた。飼育の際にも最期まで見届けるのかどうするのかまで考えなくてはいけない。乳児を対象とした時にそれらを丁寧に伝えていく大切さと共に理解してもらうようにすることが課題となった。